

ムチウチのはしり

槌田満文

テレビをつけたら、ロケ先へ向かうバスの転落事故でムチウチ症になった女優川島なお

みが無事退院して、入院中の牽引療法について語っている。聞いていて、私も同じような

経験をした三十年前のことを思い出した。

「60年安保」の年だった昭和三十五年の九月二十八日に、当時東京新聞文化部の記者だった私は、インタビュ어의仕事を終え、写真部員と一緒に社の車で帰る途中、日比谷公園の霞門近くまで来て突然ものすごいショックに見舞われた。後部座席にいた私は一瞬気を失い、気がついたら凹んだ車の屋根の衝撃で、前のめりの姿勢になっていたのである。

このアクシデントは翌二十九日、東京新聞をはじめ各紙朝刊の社会面記事になった。朝日新聞は「乗用車の上にドサリ 高さ三十メートルの足場くずれる」という三段見出しに

三段の現場写真をつけて、次のように報じている。
二十八日午後三時二十分ごろ東京都千代田

区霞ヶ関一ノ一東京検察総合庁舎八階建新築工事現場（銭高組）の西側、厚生省寄りに組んであった高さ三十メートルの鉄パイプ製足場が幅八十メートルにわたってくずれ、「頭の上に注意」の立て札ワキで信号待ちをしていた参院事務局の乗用車と、東京新聞の乗用車を押しつぶした。乗っていた人たちはザーという物が落ちる大音響に驚いて車外に飛び出したので、東京新聞文化部の槌田満文記者が肩に軽いケガをしただけで助かった。

……
毎日新聞は四段見出し「80メートルの大パイプ倒壊」に四段の写真、読売新聞は三段見出し「30トン、鉄の足場ドスン」に二段の写

真、サンケイ新聞は横見出し「ビル・ラッシュの脅威」という社会面のトップ記事になっている。

当日の午後三時ごろは、朝からの雨が上がつたばかりだったので、車の窓ガラスは全部閉まったままだった。一時停車中の屋根へ真上から崩れ落ちてきた足場は車内から見えるはずがなく、したがって「ザァー」という物が落ちる大音響も全く聞こえなかったのである。

各紙のなかでは「東京新聞の車が下敷きと」なって屋根がつぶれ、フロンドガラスがコナゴナ、客席の同社文化部士田満文記者（三三）は「へこんだ屋根で後頭部を打ち軽傷を負ったが、屋根がつぶれたショックでドアが開きカメラマンや運転手とともに脱出した」というサンケイの記事が、傍点の部分を除けば

最も事実に近い。同乗者のうち私一人が肩と背に打撲傷を負ったのは、逃げ遅れたからではなく、いちばん身長が高かったためだったのである。

事故の直後、私は近くの公衆電話から社の社会部デスクに第一報を入れ、同乗していた写真部員も現場写真を撮りまくった。私は間もなく社から迎えに来た別の車で帰り、社内の診療所で手当てを受けたが、数日後に両手のしびれを覚え、頸椎損傷の疑いで入院させられたのである。

港区西新橋にある慈恵医大附属病院の整形外科へ入ったのは十月十三日だった。入院前日のテレビで、浅沼社会党委員長が刺殺されたニュースを見たことを記憶している。

レントゲン撮影で頸椎の五、六番目に変形が認められたため、それを元に戻す治療法として、傾斜させたベッドの上部に滑車を設置し、首を引っばる紐の先に金属の重りをぶらさげて牽引することになった。

朝早く看護婦に剃刀で頭をクリクリ坊主にされた私は、何の説明もされないまま手術室へ運ばれた。いちばん皮膚が薄く骨が厚い頭頂部に二カ所、ドリルで小さな穴をあけ、そこへ金具をはめて首を引っばる紐をつないだ

のである。

それから五十日間というもの、私はベッドで横向きになることもできず、天井をにらんだままの毎日が続いた。その苦行のおかげで、その後も後遺症は一切出ずに現在にいたっている。

退院してから一年ほどたつて、谷崎潤一郎の小説「痲癩老人日記」(中央公論)昭和36年11月(37年5月)が連載され始めた。その一節に、作者をモデルにしたらしい主人公の老人が、整形外科でレントゲン診断の結果、自宅で牽引療法を試みるくだりがある。

「頸骨ノ六番目ト七番目が変形シテキルト云フ。腰椎モ変形シテキルガ、コノ方ハ頸程デナイト云フ。手が痛ンダリ麻痺シタリスルノハソノセキデアアルカラ、ソレヲ直スニハ滑リヤスイ板ヲ作ツテ下ニ滑車ヲ入レ、三十度クラキ傾斜面ニシ、最初ハ朝夕十五分間グラキソノ上ニ寝、グリーンソン氏式シュリンゲト称スルモノ(自分ノ首ノ寸法ニ合ハセテ特ニ医療器械屋ニ作ラセル一種ノ首吊リ器)ニ首ヲ入レ、体ノ重ミデ頸ガ引ツ張り上げラレルヤウニスル。……」

入院や手術なしの軽い牽引療法だったわけだが、さして効果が現われないために短期間

でやめている。痲癩老人のケースは事故の後遺症ではないから「ムチウチ症」の語が出てこないのは当然だが、私も療養中にこの言葉

を耳にしたことはなかった。アメリカで一九二八年(昭和3年)に命名された Whiplash injury (ウィップラッシュ)は鞭のしなやかな先端部分で打つこと、インジュリイは損傷)が、日本で直訳されて診断名「鞭打ち損傷」として使われ始めたのは昭和三十三年からという。背後からのショックにより、頸椎が鞭の先端の空振り運動に似た波状の動きをして損傷を生ずることから来た病名で、鞭になじみの薄い日本人にはちょっと理解しにくい名称だった。私が入院したころは出来立ての病名だったから、まだあまり使われてはいなかったらしい。

「ムチウチ症」が大きな社会問題になったのは、安保後の高度成長とともに「クルマ社会」が現出し、自動車の追突事故が急増した昭和四十年ごろからで、週刊誌にも「走る文明病」「ムチウチ」の恐怖(週刊文春)昭和42年8月28日号)といった記事が登場した。昭和三十五年に牽引療法をした私は、思えば「ムチウチのはしり」だったわけである。